嵇康論(一)——絶交書二首に見る表現の位相

大上正美

一　はじめに

三国魏の嵇康（二二三―二六二）にはよく知られているように、その生き死にとって最も緊張感を孕んだ二首の絶交書なるもの（「與山巨源絶交書」「與呂長悌絶交書」）が存在し、現在に伝わる。「書」をたたきつけて交友関係を絶つという行為は必ずしも嵇康にはじまったわけではないが、そこにおいて示された潔癖さと激しさこそは彼の性格を端的に表わすものであった。さらにそれは、性格次元を超えた倫理的政治的問題に対して、その存在の根源でことばでもって直面しようとした全体的な文学営為の一つであったと言ってよい。

この絶交書二首は、嵇康の悲惨な生涯とその人とを語るとき、何よりも生の危機を招来することになる実態とそのときの彼の内面とを如実に語る欠かせぬ資料なのである。ただその場合、そこから浮かびあがる表現の意味が作品として読まれることを通して内在的に確かめられてきたかというと、残念ながら必ずしもそうではなかった。[注①] なるほど絶交書は絶交しなければならない具体的事情があり、しかも私信でありながら多分に公的な性格をもつ「書」を与える行為を選びとっている限り、どこまでもそのときの情況に向かって語られるという、第一義的には対他性を離れては論じられない。それゆえにこそ嵇康その人の資料として大いに有効であったということなのであるが、そこで作品に即してとりあげようとするとき何より問われるべきは、その対他性を見据えながら、同時に対他性をめぐってことばがどのように働いているか、つまり作品自体としてどのような表現の位相を抱えもっているか、という問いであるだろう。さらにそこから、嵇康の文学営為の全体のなかでどういう意味をもつことになったのかについて、何らかの

見通しを与えるものが得られるかであろう。

なぜ右のような問いが必須であるかと言えば、絶交書二首の抱えもつ表現の位相が全く対照的なためである。「與山巨源絶交書」は実に饒舌に自己を語り、「與呂長悌絶交書」は自己を語ることを断念、もしくは拒絶している。前者は対自的あらわれを濃厚にもつ作品で、後者は最小限の対他性に徹底しようとする作品である。二首それぞれの他者と時代とに対する向かい方、及び自己に対する向かい方が対照的なのであるが、それは発語をめぐる表現の位相の差異によるのではないかと考えられる。以下本論で分析を試み、見通しを述べようとするのはそのことである。

二　対自の場

景元二年（二六一）友人の山濤が吏部郎に除せられたとき、河東から山陽に帰っていた嵇康は、前年にも山濤が自分を推薦しようとしたと聞いていたので、山濤の「吾を以て自らに代へしめんとす」る動きを恐れ、拒絶の意思表示のために絶交書を書き上げた。

ところで、仕官の勧めを断わるだけなら何も絶交するまでもない、ましてや絶交書をたたきつけることはなかったのではないか、との疑問がすぐに浮かぶ。これについては「止むにやまれぬ峻切の個性のあらわれ」[注②]た行為と見ることもできようし、もう少しそこに執筆の意図を認めた、最近一般的に行われているたとえば「自己の保全とともに、友人に迷惑の掛からぬことを願って」[注③]なされたものだとする見方も説得力をもつ。ここではそれに、あらかじめ嵇康の方から動こうとしたかろうじての意志表示であった点を付け加えておこう。

書中劈頭には「間ごろ足下の遷るを聞き、惕然として喜ばず、恐る　足下は庖人の獨り割くを羞ぢ、…」とあり、末尾には「若し（足下）趣かに（吾と）共に王塗に登り、相致を期し、時に懽益を爲さんと欲し、一旦之に迫らば、必ずや（吾）其の狂疾を發せん」と見える。禅譲劇を遂行する司馬昭側からの言論弾圧攻撃の前で、ただ流され恐れているだけではない。情況と事態とを先取りする意志表示を少しでも行為として刻みつけておかねば気のすまない嵇康ではなかったか。山濤を介してなされる思想的踏み絵に決定的に追いこまれる一歩手前で、自分の選択でそれと直面し、先に自分から動いているのだと思われる。意思表示と呼ぶにはそれすらあまりにも強いられた受け身の行為ではあろうが、やはりこの点に関しては、阮籍の勧進文執筆の際に示した世間向けの態度[注④]と対置しておいてよいだろう。

行為としては意志をひたすら消そうとし、逃げるに逃げられないというかたちをととのえた上で執筆する阮籍との差異が顕著な、嵇康の処世態度であった。

右のように考えられる執筆の動機や意図は、しかしどこまでも嵇康の対他的処世の位相を想い見るだけでしかなく、表現の位相を語ったことにはならない。次に彼自身の語る絶交の理由を、とくにそれをどのように語ろうとしているか、その語り口から近づかなくてはならない。

語られる絶交の理由は明快である。明快であるが、決して単純には述べられていない。まず㈠「性格的理由から、役人生活を拒否すること」が述べられ、次にその上にかぶせるようにして、㈡「自分を本当には知ってくれてはいなかったのだから、友情は成り立たず絶交するしかない」と二段階的に告げられる。仕官拒否に重ねて、絶交という行為まで選択する激しさのなかにも、嵇康なりの苦闘が見られる。というのは、高貴郷公殺害事件の翌年に仕官を強要されることが思想的踏み絵に他ならないことを十分見抜いてはいても、時代情況そのものに対して反撃的な激しい拒絶の姿勢を即自的に表明しているわけではないからである。仕官拒否のみに徹底終始すれば、その激しさは当然情況に対して直接的に向かわざるをえない。その矛先をさらに絶交という方向に激しく向けることによって、表面上は㈠の理由が薄められることになった。少くとも即自的に時代に対してことばを発することは避けられたのである。[注⑤]

このことは、終始一貫自己の思想と生活の領域の中で語り尽くそうとする姿勢につながるものである。それだからこそ自己の領域を外側から束縛しようとする強制に対して、その押しつけを決して許さないという意志の確認が貫かれ、そして存分に自己は語り尽くされることになる。その意志は構成の上に貫かれている。

冒頭部と終結部では、山濤に向かって直接的に語られている。山濤との友情が振り返られ、それが成立しなくなったための絶交が告げられる。中間部は分量的にも大半を占めるが、そのほとんどが自己告白と自己省察に向けられ、対自的に嵇康その人が自在に浮かびあがるようになっている。とりわけ後述するように、自己の具体的境位から存分に自己は主張されるのであるが、その場合、中間部・終結部ともにそのはじめに嵇康の人生観・友情観が主軸に配置されているのが見てとれる。絶交の理由㈠が中間部に、㈡が終結部に相当するのは言うまでもない。まず中間部のはじめには、

君子は百行し、塗を殊にして致を同じくし、性に循ひ

て動き、各おの安んずる所に附く。

と、山濤には山濤の、自分には自分の生き方があるのが当然の前提だと一般論的に暗示しておいた後で、自分の場合で言えば、という展開で、自己の性格と生き方とがいかに役人から遠いかと述べられていく。その場合論旨の展開として、山濤その人の生き方自体には触れられない。二五一年頃から司馬氏側の人として生きることを選んだ山濤の生き方を一応黙認するように棚上げしておいた上で、自分の立場について縦横に語る。

終結部では論旨を転じ、再び一般次元へおし上げ、

夫れ人の相知るは、其の天性を識り、因りて之を濟す(な)を貴ぶ。

と自己の友情観を提出しておいた上で、今度もまた個別次元におろし、その考えの線からみて友情の成り立たなくなった事態を告げる。[注⑥]

山濤その人の領域を侵すものではないことを強く印象づけるにあたって、嵇康は歴代の人物を次々と巧みに列挙対応させて配置しながら、更なる慎重な態度をとり続ける。もちろん自己の考え方の具体的証人として引き合いに出すのだが、世から遠ざかる人物をのみよしとする物言いはしない。世に出る人物をそれはそれとして認めつつ対応させていく口ぶりのなかに、山濤的生き方を決して批判しているわけではないという声を巧みに通底させているのである。

老子・荘子と柳下恵・東方朔を並べ、低い地位に甘んじる生き方（隠）を自分は慕うと確認しておいた上で、次には高い地位（顕）と低い地位（隠）との異なる人物を対置して、人それぞれの生きようがあるという。孔子（隠）と子文（顕）、さらには堯舜（顕）と許由（隠）、張良（顕）と接輿（隠）を対比列挙し、それらの優劣については問題にしない。人にはそれぞれの生き方があるから、それを慕うのはそれぞれの自由だとする。つまり季札が子蔵（隠）を、司馬相如が藺相如（顕）を慕うように。顕なる生き方を慕う人物がいても当然だと前提にした上で、自分の慕うのは後漢の隠者尚長と台佟だと語る。字数を必ずしもそろえないところもあるが、いずれも簡単な対応で列挙していく文体であるだけに、論旨の展開に沿って流れをスムーズにする効果が大きい。そして最後には「眞に相知る」者の例として、古くは伯成子高に対する禹、子夏に対する孔子、[注⑦]近くは徐庶に対する諸葛孔明、幼安に対する華子魚、と強制しない友情の具体例を挙げて、自己に対する山濤の場合は、と暗示して絶交の理由を明確にする。

このように山濤の領域にずかずかと自分が入りこんでいくのではないことを努めて強調する。ましてやそこに身をおく政治情況それ自体に直接的にことばを投げつけているわけではない。[注8] 存分に自己の考えを述べながら、一方では他者領域を見据え、決して言わない部分を守り続けた節度と自制は、彼の「君子は百行」云々の人生観から導かれた態度に他ならないが、同時に嵇康の巧みな方法でもあったとしなければならない。ひたすら自己の領域に終始することによって存分に自分を語ればかたるほど、存分には生きさせてはくれない時代情況そのものが浮かびあがってくるような作品の構図になっているからである。自己に徹することが逆に時代情況を衝く方法であったことをさらに確認するためには、自己に徹するやり方——自責をめぐっての叙述の仕方を見ておかなければならない。

三　自責を方法として

嵇康は自己を奔放に主張してやまないが、しかし単に即自的に世間と向かい合っているわけではなかった。自己を語るときも、自己の性格と生き方とを抉るようにして、自分は駄目な人間である、マイナス的価値しかない人間だ、と責めたてるように対自する。役人社会を生きていくという観点から判断して、「不堪」の性格と「不可」の考え方をもつ自分だから不適格者なのだというのだが、そういう自責のすがたで何よりも出色なのはその徹底の仕方である。表現の側からその特徴をあげてみよう。

(ア) 饒舌に、執拗に、繰りかえしなされること。——「直性狹中」「性有所不堪、眞不可強」「性復疏嬾」「情意傲散」「嬾與慢相成」「至性過人」「有慢弛之闕」「有必不堪者七、甚不可者二」「有心悶疾」「吾潦倒麤疏」「促中小心之性」「吾多病困」など、性格的欠陥をさまざまに言い尽くそうとする。しかもそれが各文段のいたるところにおかれ、どの切り口をとってみても、自己を語るときに出てくるのは、世間から判断すればどうしようもない程のマイナスの存在でしかない、という口ぶりである。この饒舌でしつこい位の繰りかえしは、この絶交書に条理の一貫性の欠如を指摘する[注9]誤解などを生む因になったのだろうが、しかしこの点にこそ逆に、嵇康の根源志向とエネルギー源とを見なければならないであろう。執拗に自己を切り刻んでいって、その衝き当たる基盤を自己の「性」に見据え、そこからさらに「性は化すべからず」と全てを一挙に位置付け、対他的に自己を武装していこうとする、[注10] といった発想の原点にたえずかえっていく繰りかえしなのである。

(イ) 生活次元に徹底し、具体的な性行として次々と列挙されていくこと。また、(ウ) 極めて露悪的に、自嘲的に吐かれること。

性復た疏懶、筋は駑にして肉は緩む。頭面は常に一月に十五日洗はず、大いに悶癢せざれば、沐する能はざるなり。常に小便する毎に、忍んで起たず、胞中に略轉ぜ令めて、乃めて起つのみ。

自己剔抉は右の例のように、日常生活的に具体的になされ、極めて露悪的である。たとえば劉伶がなした「我は天地を以て棟宇と爲し、屋裏を幝衣と爲す」(『世説新語』任誕篇)の幝衣を例にした自己主張や、「大人先生傳」で蝨を君子にたとえた阮籍の君子痛罵のような、下世話な例示によって上品ぶった礼法社会に痛撃を加えるすがたと質は同じなのであるが、どこまでも自己を露悪的に抉っていく痛撃である点、嵇康の場合は表向きは彼らと方向を逆にしている。この痛撃の圧巻は、よく引用される「有必不堪者七、甚不可者二」の一々の列挙であろう。一例をあげるにとどめるが、

危坐すること一時にして、痺れて搖くを得ず。性復た蝨多く、把搔已むこと無し。而るに當に裹むに章服を以てし、上官に揖拜すべし。三の不堪なり。

と、痺れや痒みを覚えることすらが、まさに自己を痛切に意識することだと言い切る。そういう身体的境位から、おかしみを含んで発語された奔放な語り口ゆえに、赤裸々な自己主張が展開されると同時に、それを束縛する向こう側の馬鹿らしさ加減が逆に浮かびあがるようになっている。「而るに」という叙述の仕方は「七不堪」のすべてに共通して用いられ、単純な叙述であるだけにかえってリズムを伴なってたたみかける効果的な文体となっている。

(エ) 他者と比較対照して、それぞれに自分は彼らに「不如」というかたちで、卑下されること。——冒頭では「足下は傍く通じ、可とすること多くして怪少なし。吾は直性狹中にして、堪へざる所多し」と山濤と対置され、次に「阮嗣宗は口に人の過ちを論ぜず。吾は毎に之を師とするも、未だ及ぶ能はず。……吾以へらく嗣宗の賢に如かず、慢弛の闕有り」と阮籍に及ばないとされる。そして礼法の士たちと比べて七不堪と二不可が列挙され、「促中小心の性を以て、此の九患を統ぶ。外難有らずんば、當に内病有るべし」とまで述べられ、自らの内に崩壞の因を見出すほどに危うい内面が強調される。最後には「自ら惟ふも亦皆今日の賢能に如かざるなり」と結論される。いずれも世間とどう関わっていくかという観点から自己卑下の徹底をはかる

のである。

以上自責のやり方を主として表現手法の面からあげてみたが、その徹底によってこそ対自的に見えてくるものを待っているような、さらにはそれが礼法世界の虚妄を暴く声となって響いてくる瞬間を待っているような、執拗でねばり強い文体がそこには獲得されてあったと言えるであろう。

四　比喩と反撃性

執拗でねばり強い文体についてみたが、表現者としての嵇康の力量が最も発揮されているのが、比喩表現である。まず冒頭部の比喩で、その特色を確認しておこう。「間ごろ足下の遷るを聞き、惕然として喜ばず」に続けて、

恐る　足下は庖人の獨り割くを羞ぢ、尸祝を引きて自ら助け、手に鸞刀を薦め、之を羶腥に漫さんことを。

と、自分を推薦することへの恐れが比喩で語られる。『荘子』逍遙遊篇の、堯が天下を譲ろうとしたとき、「庖人は庖を治らずと雖も、尸祝は樽と俎を奪ひて之に代はらず」と言って断わった許由のことばを典拠とする。庖人に堯が、尸祝に許由がたとえられていたのを、ここでは山濤と自分とに重ね合わせているが、独りで料理するのがいやなため自分までまきこもうとしているだけなのだと、厳しさを増して用いている。その上に新たに「手に鸞刀を薦め、之を羶腥に漫さん」と執拗に追加して重ねる。しかも現実そのものを「羶腥」と言ってのけ、嫌悪を露骨に示そうとする。このように冒頭で拒絶の意志が比喩によってきっぱりと表明されているのである。

右に見た特色をさらに確かめるために、次に仕官が自己の本性をゆがめることになるという中間部のしめくくりをみよう。「足下　直木の以て輪と爲す可からず、曲れる者の以て桷と爲す可からざるを見よ」と言っておいた上で、

自ら章甫を好むを見て、越人に強ふるに文冕を以てし、自ら臭腐を嗜むを以て、鴛雛を養ふに死鼠を以てす可からざるなり。

と、『荘子』逍遙遊篇及び秋水篇の寓話を典拠とする二つの比喩が重ねられ、拒絶の駄目おしと現実嫌悪を深める相乗効果が出ている。とくに、死鼠（梁宰相）を食べかけていた鴟（恵子）が空とぶ鴛雛（荘子）を恐れて威嚇する寓話の上に、山濤と自分とを重ねた後者の比喩から、より痛烈さが真直ぐに伝わる。『荘子』寓話を意匠としてまとうことによって、痛快な反撃性が獲得されていく。これは前に見た、終始自己の領域で語り、山濤やその背後の情況そ

のものへの批判の言辞を抑制していた節度と方法とは全く対照的である。

この二例のように、礼法現実に対しては比喩を用いることによって直接的な反撃の姿勢が示されている。もっとも自分は役人に向いていないという文脈の中で語られているし、その上比喩という暗示性を表向きにはとっているのだが、しかし『荘子』を意匠とした比喩ゆえにこそ、「羶腥」「文冕」「臭腐を嗜む」とよりあざやかに言ってのけることができたのでもある。自分を仕官させようとする愚かな行為をおしつける現実そのものの方がいかに馬鹿げたものであるかに関して、嫌悪の情がたしかに批判の言辞に変質していくのが見てとれよう。自責を方法とした時代を衝く姿勢は、この典拠を用いた比喩表現を通してより顕著な反撃性を獲得していると言える。

右の二例に見たことでもう一度注意しておきたいのは、その比喩は一文にあって必ず重ね合わされるようにして強調される点である。ねばり強い文体をここにも指摘することができるが、この執拗さこそが、時代を衝く声となって逆向きに響き出す上でのエネルギーとなっているのである。別の比喩で見よう。

気ままに生きて老荘思想に心寄せるようになり、「榮進の心をして日に頽れ、任實の情をして轉た篤から使む」と述べたあと、

此れ由　禽鹿の少きより馴育せらるれば、則ち教制に服従し、長じて羈がるれば、則ち狂顧して纓を頓て、湯火に赴き蹈むがごとし。

と、役人になることは鹿が調教に服従するようなものだとたとえられ、若い頃から慣されていればまだしもと一応留保しておいた上で、狂おしいまでに激しい気性が強調される。そして次にさらにかぶせるように、

飾るに金鑣を以てし、饗するに嘉肴を以てすと雖も、逾いよ長林を思ひて、志は豊草に在るなり。

と重ねられていく。この執拗な激しさを通して、依怙地な自分に執着するという次元から、次第に自己主張の声にせり上がっていくのが見てとれよう。一応留保するかに見えた官界は「飾るに金鑣を……」の声にとってかわり、それとは対照的に「逾いよ長林……」とのびやかにイメージされていく。

典拠を用いた比喩の例で言えば、末尾には、

野人に背を炙るを快とし、芹子を美とする者有り。之を至尊に獻ぜんと欲す。

と、推薦の愚かさを言うのに『列子』楊朱篇の寓話が用い

られる。同じ話の中に出てくるが、「吾が君に（日を負ふの喧かなるを）獻ぜん」とした宋の田夫の話と、「鄉豪に對して（芹萍子らを）稱す」る者の話との二つの話柄を重ねる。ここでは末尾であるだけに、現実嫌悪の情の表出というよりも、笑いとばして決着をつけようとする余裕も示されている。

以上いずれも論旨のポイントとなる終りにきっぱりと言い切られた比喩であり、まさに比喩ゆえに最も先鋭的に嵇康の真意が示されたと言ってよい。その他小きざみな比喩を多用していることにも少し触れておこう。まことに適切な箇所で用いられており、嵇康にとって本質的な比喩である点は変らない。

前章で見た自己卑下からの視点ということで見れば、自分は実生活次元では黄門（宦官）にも等しいのだとさえいう。自分には役人の資格などこれほどもない、もうこれ以上くだくだしく言うのは止めるとして、「豈に黄門を見て貞と稱す可けんや」と言ってのけられる。仕官を拒否し続けるからといって自分が頑なに貞操を守っているのだ、というふうには決して思わないで欲しい。自分はそんな格好のよい意志表示をしているわけではないという。人間失格的にさえも自己を露悪的諧謔的に打ち出す、前章で見た自責を方法とするやり方がここにも見える。自分を最も厳しく卑下する口調を事も無げにとることによって、逆に発言の自由を自分の中に確認しているのである。

また意志の固さを強調するときにも、同じやり方が用いられる。自分流の生き方で「若し道盡き塗窮まれば、則ち已まんのみ」と塗窮の状態をイメージしておいた上で、しかしその方が仕官させられるよりもずっとましだとして、「足下　之を寃げ、溝壑に轉ぜ令むるを事とする無かれ」という。窮することになろうとも、疑うことなく選択の道は一つしかない、「溝壑に轉ぜ令め」られるに等しい役人生活など眼中にすらない、と意志の固さを強調すると同時に、自己の内に誇りを回復していく手立てともなっているのである。

以上要するに、「與山巨源絶交書」は、まずは対自の場としての表現の位相が顕著であり、それに徹することにより、自責を方法として時代と向き合うことにもなりえたのである。その場合、方法というものを単に矮小化して捉えることはできない。自己の根源の「性」につき当たりつつ、それを確かめるように執拗に自己と向かい合った末に得られたものなのであり、他人の領域を侵さないかわりに自分

の領域も侵されはしないとする意志の選びとったものなのである。その場合、比喩表現その他、「與山巨源絶交書」の文体が、つまりは嵇康の表現者としてのすぐれた力量が、右のような表現の位相を提出する上に何よりも大きく働いたことは見てきた通りである。

五　嵇康の失語

山濤に絶交書を書いた翌年、景元三年（二六二）にいわゆる呂安事件がおこる。呂昭の長子呂巽（一に呂遜）字は長悌が、庶弟の呂安（字は仲悌）の妻徐氏に横恋慕し、思いを遂げたことを知った呂安は嵇康に相談する。嵇康はかねてから親しい両者の間に入って、以後「父子の情」をもって接することを呂巽に約束させる。これで一件落着したかに見えたこの事件は、呂巽の方から先手が打たれ呂安を訴え出るというかたちで、公の場に出された。『晉陽秋』（『世説新語』雅量篇注引）に「陰かに母を撾つを告げ、表して遼に徙さんことを求め」たとあるように、不孝罪で訴えたのである。呂安弁護のために嵇康は証人として出廷することになるが、呂巽の背後で鍾会が事をとりしきっていて、そのまま嵇康は「敗俗の士」としてその危険思想を糾弾され、投獄されることになる。その間、呂巽の襄切り行為に対して書かれたのが「與呂長悌絶交書」なる一文である。恐らく出廷以前に執筆されたものと思われる。[注⑪]

この二首目の絶交書は、一年前の「與山巨源絶交書」と比べて著しく様相を異にするものである。「與山巨源絶交書」が一五〇〇字近くにものぼる長文で、しかも饒舌で執拗な文体を呈していたのに対し、「與呂長悌絶交書」は二六〇字足らずの短文で、簡潔であっさりとした文章である。前者には嵇康の主張が存分に述べられていたが、後者にはそれがなく、事実の経過が述べられているに過ぎない。[注⑫]

この違いはどこからくるのか。一つは情況の悪化が考えられよう。この一年、事態は嵇康にとって生の危機的情況がいよいよさし迫ったものとなっていた。山濤への絶交書の場合はまだ試されていた。山濤が嵇康に手をさしのべることにどれだけの可能性があったかは疑問だが、それでも仕官すれば思想的危険人物のレッテルは少しでも和らげられたかも知れない。しかし嵇康はそれすら自分の方から峻拒した。今後は反体制的に生き続けることをかたちとして表明してしまっていた。後は司馬昭と鍾会が最終的にどう罠をしかけるか、そしてその罠に嵇康がいつはまるかであった。そういう生の危機の真っ直中にいたがために、事実

経過に終始せざるを得なかったとも言えるだろう。

また、山濤と呂巽とでは嵇康の関わり方に違いがあることも大きかったであろう。山濤への絶交書は山濤に累が及ぶことを恐れた嵇康の深い配慮の末になるものだ、という解釈が通説となっているのも、やはり山濤と呂巽とは同じく司馬昭側の人間でも立場も異なるし、嵇康の思い入れも異なるからである。山濤は阮籍以上に司馬昭側の立場を明確にしていたが、彼の出仕と処世はかなり慎重であり、いわゆる礼法の士とは距離がある。[注13] しかもその度量と識見については嵇康も一目おいていた。それに対して呂巽は鍾会とつながり、禅譲劇画策の悪の部分を積極的に担った側にかなり近かったとみるべきであろう。その差が一方ではことば多く自己を語り、一方ではことばを失くして必要最少限の事実経過だけを述べるかたちをとらせたのであったろう。

右の二点を抜きには考えられないが、しかしそれもあくまでも外側からの接近でしかない。ここでも「與呂長悌絶交書」を作品として成立させる表現の位相から考えていかねばならない。

明確に三文段構成をとっているが、冒頭で呂巽とのこれまでの親交と呂安への思い入れを語り、次に事件がもち上がった後の処理をめぐって記し、最後に呂巽の裏切りと絶交の理由とを述べる。時間の流れに沿って具体的事実経過を簡潔に記し、比喩のまったくない、事実を叙述するだけの極めて即物的なことばに終始している。そこでは自己の思想や生き方が主張されているわけではなく、助字も比較的に少なく出来るだけ感情を抑制した、一句一句が短いぶっきらぼうでさえある文体である。それゆえに、はじめて自己の感情がぶつけられる結びの部分がかえってきわ立つと言える。

今　都（呂安の小名）の罪を獲るは、吾　之に負くを爲せばなり。吾の都に負くは、足下の吾に負くに由ればなり。

と、絶交の理由がたたみかけるようにたたきつけられる。それに続けて吐き捨てるように、

復（は）た何をか言はんや。此くの若くんば、心に復たび足下と交はること無けん。古の君子は絶交するに醜言を出さず。

と言う。これが唯一典拠をもったことばである。『戰國策』燕策二に載せる楽毅が燕の恵王に報じた書のなかの「臣は聞く　古の君子は交はり絶つも悪聲を出さず、忠臣の去るや其の名を潔くせず」を踏まえている。「悪聲」を「醜言」

に変えているのは、戴明揚氏も指摘するように、『詩經』[注14]鄘風・牆有茨の「道ふ可き所なれども、之を言へば醜ければなり」を意識し、多くのことばを抱えこみながらことばを呑むばかりだ、と強調しているのであろう。「醜言を出さず」として、呂巽の醜悪な行為への糾弾や、人間としての最低元のモラルと自己の正当性の主張、礼法をふりかざす擬制批判、そしてその前での自己の無力感――それらすべてを背後におしやってしまう。そこからは、呂巽に対して何を言ってもはじまらない、現実の前であるのは失語だけだ、とする深い幻滅ばかりがふくれあがってくるようだ。ただ見てきたように、そのおおむねは事実を叙述するだけの感情を抑制した文体であったことを思えば、事件の低次元的な展開や馬鹿げた礼法世界に幻滅しながらも、(あるいは、幻滅するがゆえにと言うべきか、)嵇康は即物的なことばでもって対応していた。従って、深い幻滅であると同時に、そういう呂巽や現実に向けて心からのことばを決して届かせはしない、と厳しくことばを呑まんとする自制の意志(覚悟)も見なければならないのではないか。

というのは、「不出醜言」の「不」に注意したいからである。総じて「與呂長悌絶交書」には「不」が少ない。しかも自分の主体的な意志を示す「不」はここだけである。事件の経過を述べるに終始しようとする文章であるから当然とも言えるが、それだけにここでの「醜言を出さず」という口調はきっぱりと厳しい。その厳しさは言うまでもなく呂巽に向けられたものだが、と同時に自身に対してもつきつけられたはずである。これは「與山巨源絶交書」にあって自責の際に頻発された「不」と実に好対照をなしていると思われる。

現実の前で失語するしかないと幻滅することと、そんな現実を拒絶して沈黙を自ら選びとっていこうとする厳しい意志確認をすることとは、相容れないものというわけでは必ずしもない。むしろ、この共有こそがこの絶交書の表現の位相である、と言ってよいのではないか。このことについて、もう少し異なる視野から見てみよう。

嵇康が事件の経過を語るときの語り口を見ると、必ず呂巽と自身と呂安との三者の関係においてのみことばにしようとしている。背後の権力の構図については暗示的にも言わない。「與山巨源絶交書」のように比喩で嫌悪の情を投げつけるというやり方もまったくとらない。ひたすら、「足下」「吾」「阿都」の関係を提示するだけである。それぞれに短い一文ごとに、くどいほど三者の人称代名詞が頻用されていることにすぐ気がつくであろう。全二五七字の

中に「足下」が一五回、「吾」が一一回、「阿都（都）」が一一回使われている。これは、行為自体の善悪（裏切りは別にして）や生き方の違いを決して口にしないことと関係がある。そもそもの発端は呂巽の横恋慕にある。その醜行については触れない。それに続く関係の修復とそのくずれだけを問題にする。一度は関係の修復したものを裏切りによって崩壊させてしまった、それが今の現実のすがたであるなら、それをことばと行為とでもって追認するだけだ、という態度である。ことばにする気もおこらないが敢えて言うのは呂安に悪いからである、とする深い痛みのなかにいることを浮かびあがらせる。信念とか思想とか、処世次元や政治的立場とかをすべて背後におしやり、眼に見える事実のうちの、三者の関係の中間項の自分の立つ瀬がないことを強調する。従って、呂安に結果として悪いことをしたという点にのみこの絶交書のなかでことばにする必要性があるのであり、呂巽に絶交を告げるのもそういう観点からだけである。呂巽と一対一に向き合おうとは決してしていない。だからこそ呂安と自分との関係のくずれの原因としてなされる詰問を除いては、呂巽その人を攻撃しようとはしない。それをことばにのせることを拒絶する。言ってみればここでは、ことばによって自己と周りの関係を問い直したり、その関係の中から自己を深めたりすることは放棄されている。「與呂長悌絶交書」を執筆して自己に衝き当たるということはまったくない。つまりは対自性をまったく持たないことによって、最小限の対他性に徹しようとしていることばの位相が浮かびあがってくるのである。

右に見たような対他性に終始することばは、「與山巨源絶交書」のように現実を激しく執拗に衝くことばにいつしか変容していくということは決してなく、「不出醜言」という四字によって現実の側の醜さが瞬時に喝破されるに止まるだけである。言い換えれば、ことばが対自性を持たないため、この作品自体は、失語するばかりだという幻滅の大きさをささくれ立つように暗示し、ひたすら沈黙するしかないのだと意志確認して内面の体勢をかろうじて立て直そうとしている必死のすがたを暗示するに止まるということでもある。

ところで、ここでは醜悪な現実に対して嵇康が失語の状態にあることを告白しているのだが、それはそのとき深く生の危機にさらされていたことを意味していることでもあった。嵇康が法廷で鍾会から糾弾されたとき、彼がどのようなことばを述べたか、現在伝わらないが、しかしそのとき滔々とことばを費したとは到底思われない。八年前夏侯

玄は、李豊蜂起の陰謀に加わったとして連座させられ獄中にあったが、司馬師の意を受けて取り調べにあたった鍾毓に向かって「吾 當(は)た何をか辭(ことば)あらんや。……卿(きみ) 便(すみ)やかに吾が爲に作れ」と言うだけで、でっち上げの事態にも神色自若たる態度をとり続けるばかりであった[注15]という。そのときの夏侯玄の失語と通底する内面を嵇康は抱えもっていたのである。刑死に臨んで顔色一つ変えず琴を引きよせた有名なエピソード[注16]を重ね合わせれば、そのことの大要は想像できよう。

対他性に終始することばを発してしまえば、ことは醜悪な現実にからめとられてしまう。絶交書を書いたことが事態を悪くしたであろうことは想像できる。それもまたたしかに止むにやまれぬ嵇康の激しい性格と強い倫理意識ゆえの行為ではあろうが、案の定、証人台へと、さらには被告席へと追いつめられたではないか。しかしこの絶交書を書いたことの文学的意味、内面的意味は大きかった、とやはり言っておかなくてはならない。もう一度言えば、「醜言を出さず」とは現実に対する失語の状態を示すものであり、同時に沈黙への意志、言い換えれば、自己が自己である場を対他的には設けない、それを断固として拒否し続ける覚悟を表明していたのであった[注17]。

六　おわりに

「與呂長悌絶交書」で嵇康は、現実そのものへの幻滅を、現実に向かって発せられることばを拒絶するとして表明した。そうすることによって思想上発語上、擬制でしかない現実そのものを無視しようとした。処世現実から見れば、嵇康は失語の淵に投げやられたということになり、圧倒的に劣勢でしかない彼は刑死という敗北者として一生を終えたのである。しかし表現の営みの次元から言えば、その失語は彼のことばが決して届かない現実に対する幻滅の大きさゆえの失語であり、同時にその擬制を表現次元の側から突き放す冷めた眼ゆえの沈黙でもあり、そんな虚妄に向けて決してことばを届かせはしないことを選びとった覚悟ゆえの沈黙でもあることを意味していた。それは倫理的覚悟であるだけではなく、文体として選んだ覚悟でもあったことは見てきた通りである。従ってそれは、内に向かうことば、自己のあるべき姿を問うための本来的なことばそのものへの幻滅ではなかったということでもある。「醜言を出さず」とは、裏をかえせば、ことばそのものを失くしたわけではない、と宣言していたということになるのである。

しかし言うまでもないことだが、ことは自己の内と外と

いう単純な図式化ですましおおせるものではありえない。実はこういうかたちで現実に背を向けたとき、それは同時に自己のことば（文学）の危機でもあったのである。なぜなら失語の淵に投げやられたことが、即沈黙を選びとったその内面の豊饒さを保障するものではないからである。そして呪わしい現実との関係を問うことなくして、自己は自己でありえないからである。何よりも嵇康の文学営為そのものが、そういう自己剔抉の様相を根柢にもっていた。彼の純粋に観念上の「論」にしても、そもそも「現実への批判性がその発想の根源であった」[注18]のであり、文学営為と通底している。従って「與呂長悌絶交書」執筆時は現実次元での生の危機の真っ直中にいるだけでなく、表現次元でも内に向かうことばの危機の中にあったのである。

この二重の危機については、「幽憤詩」を念頭においてみればより明らかになるであろう。「與呂長悌絶交書」執筆と同じ年か、その翌年かに書かれた「幽憤詩」にあっては、より徹底した抉りようで自己が自伝的に検証されていく。そこでは、もう一度自己と現実との関係が、何をおいても自己の内面を抉るというかたちを徹底させることによって追求されていく。

その場合「幽憤詩」にあっても、「與山巨源絶交書」に見てとれた自責の声が現実の虚妄を激しく衝く声となって響いてくる構図になっているのだが、もはや自責を方法としたというだけではおさまらないほど、自己は抉り出され、痛みは深い。「與山巨源絶交書」に見えた赤裸々で奔放な自己主張という面は薄められ、その分現実を衝く声がより痛々しく、より絶望的に発せられていると言えよう。「書」と「詩」というジャンルの差も考えられるが、それ以上にそこからは、一度は「與呂長悌絶交書」で失語の淵に立たされ、そしてその幻滅をくぐり抜けてきた痛みの深まりをたしかに読みとることができるようである。

現実の生の次元と表現の次元との二重の危機の直中にいた嵇康は、その生の危機が絶対的となったとき、「幽憤詩」を書くことでことばの危機をくぐり抜け、自己と向かい合うことができた。それは言ってみれば、生の絶望的決定が、彼をして現実に失語するしかないことの意味を再び自己を抉ることによって問わしめたゆえである。ことばが内に向かうとはそのことをおいて他にはない。

これらの問題については右のような予感を述べるにとどめるが、次にはこの「幽憤詩」をめぐる検証と考察を用意しなければならないであろう。

〈注〉

① 「與山巨源絶交書」は『文選』巻四十三に収録され、嵇康を想起するものとしてしばしば文学者たちに歌われた。また『文心雕龍』書記篇に「志高くして、辭偉なり」と評されるなど、以後も嵇康を論評するときには必ず引き合いに出された。しかしそのおおむねは簡単なコメントに過ぎないか、そうでなくとも彼の性格と思想とを語るための材料の域を出ないかのようである。一方の「與呂長悌絶交書」に至っては、そのようなとりあげ方さえもなされてこなかったと言えよう。呂巽と呂安との間に立って動いた事の経過が、たとえば『晉陽秋』(『世説新語』雅量篇注引)に「以て康に咨る。康喩して之を抑ふ」などの事実として史書に組み入れられていったことを知ることができるが、決して作品として読まれてきたわけではなかった。ごく最近では松本幸男「嵇康と呂安事件」(『立命館文学』四三〇―四三二合併号)が正面からとりあげた唯一の論文で、教えられる点も多い。しかし本論の目ざすところとその方法は、松本氏のそれと異にするものである。

なお嵇康の晩年の事跡、二首の絶交書の制作年代について、若干議論の残るところであるが、本論ではとりあえずは通説によっている。引用した二首の本文は、『嵇康集校注』(一九六二年七月北京・人民文学出版社)によることとし、適宜諸書を参考にした。

② 龔武「嵇康〈幽憤詩〉辨析」(『中国古典文学論叢』第二輯・人民文学出版社)

③ 小尾郊一『文選六』(集英社)九頁を引いたが、最近日本で執筆の動機に触れるものはいずれもこのような見解をとっている。

④ 『晉書』阮籍傳に「會帝讓九錫、公卿將勸進、使籍爲其辭、籍沈醉忘作。臨詣府、使取之、見籍方據案醉眠。使者以告、籍便書案、使寫之、無所改竄。辭甚清壯、爲時所重。」とある。拙稿「阮籍の『爲鄭沖勸晉王牋』について」(『日本中国学会報』第三十四集)参照。

⑤ 嵇康は仕官拒否の理由として自己の性格と考え方とを述べつくした後、あらためて終結部で付け加える。養生の術を学びたいこと、母が亡くなったばかりで悲しみのなかにいること、成人に達しない子供たちを教養していかなければいけないこと、多病の身であること、を列挙する。これもまた、官途につけない事情をさらに複雑にすることによって、時代情況批判の跡をくらます効果を上げている。

⑥ 嵇康は終結部で「区区の意有りと雖も、亦已に疏なり」と言う。山濤の善意を受けとめながら、しかし善意や誠実さの次元を超えた生き方の根源に関わる問題だとする。あくまでも友情の崩壊を表に打ち出しながら、友情が成立しえなくなったのも時代情況の悪化のしからしむるもので、そこでの生き方の差異が顕在化されざるをえなくなったのだ、という観点をも当然含んでいるはずである。

⑦ 「仲尼不假蓋於子夏、護其短也」の例示は、吝嗇の子夏であるから、車の傘を借りに行けば貸したがらないだろう、そうす

ると子夏の欠点を暴露してしまうことになる、それを恐れて孔子は借りに行かせなかった、という『孔子家語』致思篇の話を踏まえる。仕官を強制しないとする他の三例と必ずしもそっくり対応するわけではない。が、いささか穿鑿するなら、山濤の推薦によって自分の欠点が公にさらされることになる、その「(吾が)短を護」ってくれるのが友情というものではないか、との声が響かせられている。ここにも、自分を卑下した地点からの発言を見ることができよう。

⑧『魏氏春秋』(『三國志・魏書』王粲傳注引)や『嵇康別傳』(『世説新語』棲逸篇注引)などによれば、「與山巨源絶交書」の中の「湯武を非とし、周孔を薄んず」の句が司馬昭の逆鱗に触れ、反体制的言辞としてとり上げられて思想犯としての行く末を決めたことになった。武力抵抗を次々に倒し、次には禅譲の茶番劇を延々と繰り返す輿論作りの中、周公になぞらえられた司馬昭であってみれば、政治的危険思想とみなされたのも当然すぎることではあった。処世次元でのみ問題にするなら、たしかに嵇康にとっては勇み足であったことは否定できない。しかしそれ以上に、揺ぎようもなく司馬昭は圧倒的権力を掌握した絶対優位の立場にあったので、あげ足とりの一つのきっかけに過ぎなかったのである。また何よりも表現次元で言えば、問題はこの句が作品の中間部で、役人として認められはしないとする自己認識――「不可」なるものの一つとして告白された箇所にある点である。自己を衝く痛みをも伴なった文脈の中で発言されたのであり、司馬権力そのものへの直接的攻撃としてなされた発言というすがたを決して表向きにはとっていなかったのである。もちろん嵇康の真意は批判にあったのだが、しかしそれすら文脈は仮装していたのである。従って表現次元から見れば、その仮装が現実には有効でなかったというに過ぎない、ということになるのである。

⑨ 網祐次『文選』(明徳出版社)には「この手紙は、仕官を欲しないことを終始憤激極端の語を以て強調し、甚だ神経質的である。そのためでもあろうか、条理一貫とは言えない」(二三三頁)とあり、批判的読みを簡潔に提出しているが、引用の後半部分については首肯できない。

⑩「瞿然として自責すると雖も、然れども性は化す可からず」と、自己の根源の「性」にゆきつくと発言する。それを近代的な眼でみて、彼の自責は徹底しない、ということは当らないと思う。自責のはてにかろうじて自己を確かめ、あくまでも自己の根源の「性」に終始し、それを基盤に攻撃性へと転化すると言ってよいのではないか。自己剔抉の激しさは裏の声として現実を衝く声となって次第に大きく響いてくる。自責という仮装が意志された仮装へと転化できるのも、この一文ゆえではなかろうか。

⑪「干寶云、呂安兄巽善於鍾會、巽爲相國掾、俱有寵於司馬文王、故遂抵安罪。」

(『三國志・魏書』王粲傳裴松之注)

⑫ 最近刊行された徐公持『阮籍與嵇康』(上海古籍出版社)にも、「作者雖然懷着滿腔義憤、但書中只有嚴正冷峻的説理、而

無尖刻的詈罵。他對于對方的極大蔑視、寓含在絶交不出醜言的平靜語氣中。」（六六頁）と的確に指摘されている。

⑬　たとえば注⑫にあげた徐公持『阮籍與嵇康』のように、山濤や王戎を、政治的立場を異にするというだけの理由で「礼法の士」と位置づけたりする（六〇頁）のは、安易に過ぎよう。

⑭『嵇康集校注』一三三頁。

⑮『世語』（『三國志・魏書』夏侯玄傳注引）に「玄至廷尉、不肯下辭。廷尉鍾毓自臨治玄。玄正色責毓曰、『吾當何辭、卿爲令史責人也、卿便爲吾作。』毓以其名士、節高不可屈、而獄當竟、夜爲作辭、令與事相附、流涕以示玄。玄視、領之而已。」と見える。拙稿「鍾会論」（『青山学院大学文学部紀要』第三〇号）にも触れておいた。

⑯「嵇中散臨刑東市、神氣不變、索琴彈之、奏廣陵散。曲終曰、袁孝尼嘗請學此散、吾靳固不與、廣陵散、於今絶矣。」（『世説新語』雅量篇）

⑰　別に「俟ひを恥ぢて直言すれば、禍と相逢ふ」（「秋胡行」其二）とも発言する嵇康であるが、ここでの沈黙の覚悟はそれとはニュアンスを異にする。

また沈黙の意味を強調して考えるとき、目の前の現実とは異なる真の現実を切実に希求する沈黙の中に嵇康はいたということである。これは、「釋私論」で一般に考えられている公私を逆転し、今の現実など公ではない、私なる世界に過ぎぬといってのけた発言にも見合うものである。公から見たとき今ある現実の方こそ擬制（フィクション）でしかない、とする現実を危うくする視点（「俗を敗る」思想）を、内に峻烈に抱えこむことに他ならない。

⑱　高田淳「嵇康の『離』の立場」（『大倉山学院紀要』2）参照。

（青山学院大学）